

「物性研究・電子版」の発行がはじまって、はやくも半年余りが経過した。この間、5月号と8月号を発行してきた。これらに加えて、今回11月号を発行する次第である。講義ノート、投稿原稿、研究会報告、修士論文、ひろばなど、さまざまなジャンルの原稿が掲載されており、順調な滑り出しに、編集委員として安堵している。

世の中に目を向けると、緊迫する日中・日韓関係、日本・世界経済の減速・失速、東京都知事選挙、衆議院の解散総選挙とさまざまな緊張状態が続いている。東日本大震災と原発事故からの復興・復旧も地域ごとの温度差がある中、私たちの安全神話や固定観念もどこまでも変貌を余儀なくされ続けている。オール電化一辺倒だった頃、灯油系統の暖房機器は電気店では扱う事はなかった。ところが、今ではどこの電気店でも、灯油系統の暖房機器を取り扱うようになっている。歴史というものが、1つの状態から別の状態へと揺れ動くありさまを、これほど痛烈に体験することもなかったように思う。こうした歴史的な変遷は、弁証法と呼ばれている。こうした弁証法的な歴史的変遷は、時代の流れであるばかりでなく、一人の研究者の思考の流れでもある。それが、哲学的弁証法と呼ばれている。

面白いのは、哲学的弁証法を一切知らない研究者同士でも、見解の一致に至ることである。例えば、旧ソビエト連邦のパブロフは、自国で恵まれた弁証法的環境にありながら、弁証法を一切知っていなかった。ところが、彼の研究には、「行為」の形で弁証法の方法論がふくまれていたのである。その形を他の学者たちが、反省的に分析して弁証法を取りだしたのである。

私たちの「行為」も、後世の人々によってその意味が取り出された時、どのような意味や説明がなされることになるのだろうか。現時点の情報を発信する「物性研究・電子版」が、どのような評価を受けるのか、これからしばらくは歴史を重ねていく必要がある。

(M.M.)